築上町歴史散歩

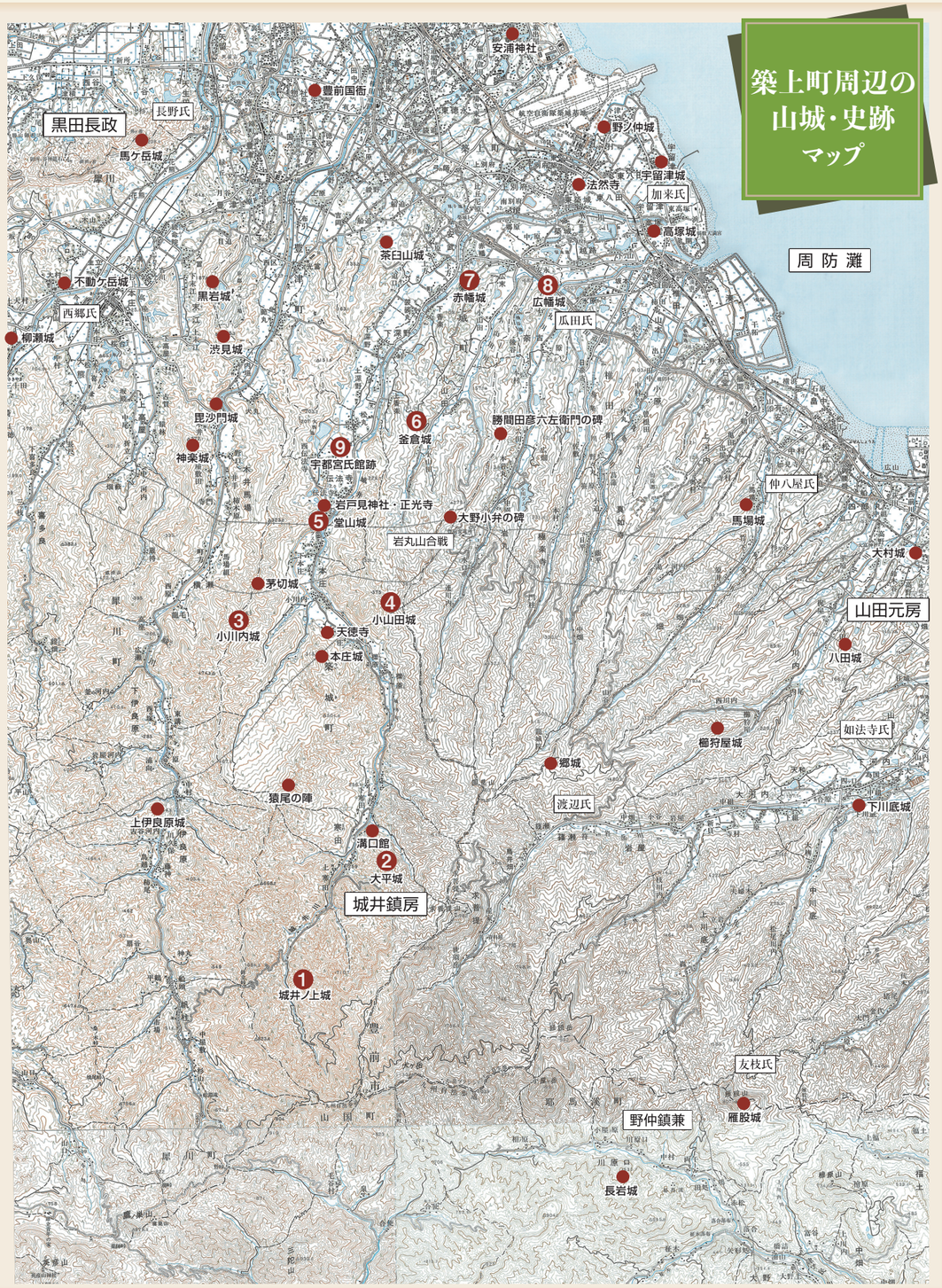
Chikujo Town History walk *Vol.1*

築上町教育委員会文化財保護係 TEL 0930-52-3771
〒829-0106 福岡県築上郡築上町大字船迫 1342-22

ウェブサイト 築上町歴史散歩 検索

山城ってなあ～に？

城といえば天守閣や櫓と土塀、高い石垣を思い浮かべますが、これは城主の居住施設と政治・軍事施設が合体した、江戸時代の大規模な城の形態です。鎌倉時代は平地や台地の周りを堀や土塁で方形に区画した、武士の館が居住と軍事施設を兼ねていましたが、南北朝時代以降、戦乱が激しくなると、館は麓などにあって軍事施設が分離して、険しい山頂に城が築かれるようになります。これが山城です。山城は戦のために使うため、防御と攻撃のための様々な「仕掛け」が施されています。出入口を小さく複雑にする「虎口」「横矢掛り」、竪堀・横堀・土塁で侵入を防ぎ、また敵が登れないよう地面を急傾斜に削る「切岸」など、まさに「土の城」です。戦国時代末期になると石垣を積むようになっていきます。



このリーフレットは築城飛行場関連再編関連特別事業で制作しました。

宇都宮氏の歴史　戦国のムラ城井谷（きいだに）

藤原氏と中原氏

宇都宮氏の遠祖は藤原道兼という。その曾孫の宗円が下野国日光山別当となり、前九年の役での功績により、後冷泉天皇より下野国を賜った。宗円の子が八田宗綱で嫡子朝綱が宇都宮姓を初めて名乗った。宗綱は常陸国八田地域、下野国宇都宮地域も勢力下に置き、下野国一宮の二荒山神社の検校も兼ねた。一方、宗綱の兄弟の宗房は中原氏を名乗り、鳥羽天皇の皇后、待賢門院璋子に仕え、造酒司の長官や御所を警備する北面侍でもあった。下野宇都宮氏が藤原氏系、豊前宇都宮氏が中原氏系と考えられる。

宇都宮信房肖像画（部分） 元禄7年（1694）銘
＊後裔の春房が信房ゆかり泉涌寺に寄進。

信房の豊前入部

宗房の子（孫とも）、信房も朝廷に仕え中原氏を名乗った。『吾妻鏡』によると、文治4年（1188）、信房は源頼朝の命により、反旗を翻して鬼界島に逃げた義経一派を攻略し、平氏の支配権の強い九州統一の突破口を開いた。この功績により建久3年（1192）、田川郡伊方荘の地頭職、豊前国衙の田所職、税所職ほか、田川郡柿原名や平家方の板井種遠跡地の伝法寺庄などの領地を得た。信房は豊前に入国（行橋市稲童・安浦神社）すると、豊前国府から祓川上流の木井馬場（みやこ町）を本拠とし神楽城を築いた。信房は仏教に造詣が深く、晩年に京都から高僧俊芿（しゅんじょう）を豊前に招き夫婦ともに出家し、のち上洛し俊芿のために東山に泉涌寺を寄進した。木井馬場には信房供養塔とされる楞厳寺の律宗系の大型五輪塔や城山寺跡の四方仏層塔などが優れた石造物が残る。

後冷泉天皇より下賜された三足蟇香炉（天徳寺蔵）

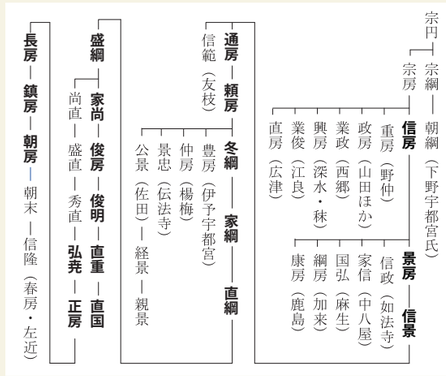
本拠地を城井谷へ移転

南北朝時代、頼房は本拠地を築上町本庄（城井谷）に移し、菩提寺の天徳寺を建立した。この頃から宇都宮氏は土着化して城井氏を名乗り、一族も豊前各地に根をおろし野仲氏・山田氏・西郷氏・友枝氏・佐田氏となった。通房・頼房・冬綱の時代（14世紀代）は幕府執権の北条得宗家に接近し勢力を広げ、肥後国守護代、筑後国、豊前国守護に任命され、豊前最大の武士団となった。この頃に築上町の城井谷の松丸に大規模館跡（右写真）を築いたと考えられる。しかし南北朝の九州争乱の中、応安7年（1374）、冬綱は南朝方として幕府に反乱を起こし、今川了俊に鎮圧されると勢力を失い、豊前国は大内氏支配となった。さらに大友氏の支配、毛利氏の豊前進出など戦国の争乱となっていく。

宇都宮氏の本拠地「城井谷」（中央の台地が館跡）

最後の惣領、鎮房と朝房の一揆と滅亡

戦国時代末期、北部九州は大友氏と島津氏の勢力争いの中、鎮房は大友氏と毛利氏の一派の秋月氏、高橋氏と協調しながらも自主独立の立場であった。天正14年（1586）10月、豊臣秀吉の九州統一の先遣隊黒田孝高は豊前に入り、長野氏はじめ山田、広津、仲八屋、時枝氏などを調略した。11月、黒田勢は28,000人の大軍で加来与次郎の宇留津城（築上町）を陥落させ、400人と磔にしたという。天正15年3月25日、秀吉は小倉城に入り、島津攻めが始まった。鎮房の嫡男朝房は秀吉の一番隊に編入され、（次ページ陣立書）功績をあげたが、九州統一後の豊前国は黒田孝高の所領となり、鎮房は本領安堵を反故にされ、伊予国転封を命じられた。これを不服として10月、豊前国一帯で城井鎮房と野仲鎮兼を筆頭に、宇都宮一族が黒田氏に対し蜂起したが、黒田、吉川、小早川の軍に鎮圧された。城井谷で最後まで抵抗した鎮房は、岩丸山の峯合戦で黒田長政を撃退するが、11月には猿尾の陣から大平城を攻められ劣勢となり、翌年1月和睦を受け入れた。しかし天正16年（1588）4月20日、鎮房は中津城で長政に、朝房も肥後で謀殺され、豊前宇都宮氏400年の歴史は幕を閉じた。



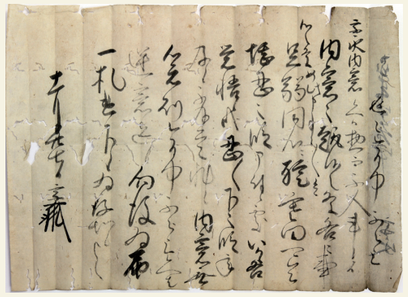
豊前宇都宮氏系図（太字は嫡流当主）

戦国時代の宇都宮氏を物語る資料

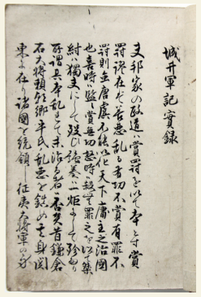
鎮房と朝房に関する資料は非常に少ない。英彦山の「刀衆先代帳」に、天正6年（1578）「城井殿は日向で島津軍の捕虜になる」（耳川の戦いに大友軍で参加）、との記載がある。しかし天正8年以降、反大友となった鎮房は一族の野仲鎮兼（大友氏側）と敵対し東へ進出。松尾山医王寺（上毛町）を放火、中津川で合戦し、宇佐郡赤尾攻めで一族の佐田氏とも敵対した。西側では高橋氏の豊前進出を懸念し、馬ヶ岳城（行橋市）の長野氏に援軍し、姻戚の秋月氏と敵対するなど資料から分かる。まさに戦国時代の身内での生き残り戦であった。

右の鎮房書状案は黒田氏との戦いの末期、天正15年（1587）11月27日、寒田へ家族（女性・子供）ともに籠城するように、家臣に催促する文書である。なかなか籠城しない家臣への鎮房のいらだちとあせり、戦況の切迫感が伝わってくる。

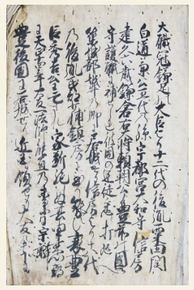
鎮房が中津城で謀殺されて66年後の承応3年（1654）には、家臣の渡辺左京亮義春が『城井軍記実録』を、また明暦4年（1658）に松田小吉の甥の池永教明が『城井闘諍記』を書いた。江戸時代には宇都宮氏と黒田氏の軍記が書かれ、数多く書写され、また貞享元年（1684）頃には、後裔の当主春房（信隆・種房・左近）は宇都宮家復興運動を起こし、帰農していた旧家臣を訪ね、お家再興願を幕府に提出するため支援を依頼した。この時これらの異本や家譜、系図などが数多く書かれ旧家臣の家に残された。



城井鎮房書状案（進家文書）



城井軍記実録（渡辺家）



城井闘諍記（恵良本）

◀ 豊臣秀吉九州攻め陣立書（天正15年）3月25日（大阪・銀山寺所蔵）
＊一番の2行目に「城井弥三郎」の名が記される。

城井谷絵図（町指定文化財・築上町所蔵）

宇都宮氏滅亡後の元禄7年（1694）、福岡藩主黒田長重は家譜編纂を儒学者貝原益軒に命じ、益軒は豊前豊後の史跡調査を行った。その時の見聞録が『豊国紀行』で、この時に藩の絵師の衣笠半助は、城井谷での黒田氏と宇都宮氏の合戦跡などを描いた。益軒は馬ヶ岳城を見た後、天生田（行橋市）を経て、節丸（みやこ町）に宿泊。翌日、松丸に入り館跡を見学、さらに天徳寺で位牌などを見て、寒田で城跡を見学し、椎田で宿をとった。絵図には城井ノ上城址や館跡、「峰合戦」の跡などが描かれている。この絵図の原本と思われる大型の城井谷絵図が福岡県立図書館にある。

城井谷絵図　＊文政7年（1824）写し

天徳寺・正光寺と岩戸見神社

菩提寺の月光山天徳寺は正慶年間（1332）、五代目の頼房が開基。のち国東の泉福寺蔵山禅師により天台宗から曹洞宗に改宗。古い本尊（写真右）は、釈迦如来の頭胸部で南北朝時代の京都院派仏師作の優品。境内墓所には長甫、鎮房、朝房の供養塔や、室町時代の城井俊房の宝篋印塔がある。寺の裏山は明応10年（1501）、大内氏によって落城した城井直重の本庄城で、寺の背後と周辺三カ所の尾根に堀切や郭がある。

初代の信房は下野国から文殊菩薩を勧進し不老山正光寺を開いた。文殊菩薩は檜材の寄木造りで、農耕牛を思わせる力強い獅子に座す。文殊菩薩は仏教の教えを説く仏として、智恵をつかさどる菩薩と言われ、右手に智剣を左手に経巻をいただく。文殊信仰は奈良西大寺律宗の影響が強いといわれ、信房は晩年律宗に帰依している。文殊菩薩は年に一度2月25日と26日にご開帳される。9月には境内一帯に白い彼岸花が咲く。

また信房は下野国より二荒大明神を招来し、岩戸見神社として祀った。神社境内にはイチイガシ（胸高周囲4.8m）の神木がそびえ立つ。神社には岩戸神楽と岩戸楽の伝統芸能が継承される。

釈迦如来像

天徳寺（鎮房ほか室町時代以降の墓所）

文殊菩薩騎獅子像（正光寺）

岩戸見神社と岩戸楽

❶ 城井ノ上城址（寒田）

城井谷城峡之図（国立公文書館所蔵）天保13年（1842）

『城井谷絵図』には「城井盾籠所」と記される。上の絵図に描かれるように周囲を岩壁に囲まれた谷地形で、谷の入口の巨大な岩穴が表門（写真）と呼ばれ、谷の一番奥にもあり、裏門と呼んでいる。谷の中央は広くなり、ここが隠れ城と言われる。村人が避難のため立てこもる場所と考えられ、『進家文書』にある「寒田への籠城」とはここのことかもしれない。下流にそびえ立つ独立状の岩の「三丁弓の岩」は、ここを防ぐのに三丁の弓で足りたことに由来する。

❷ 大平城址（寒田）

天正15年（1587）10月2日、鎮房は田川郡柿原から帰還し、大村助右衛門から大平城を奪還して黒田氏に蜂起する。地名は越崎平。痩せ尾根に主郭、副郭、腰郭がある。宇都宮氏後期の本城。左奥の山は求菩提山。

❸ 小川内城址（本庄・みやこ町横瀬）

黒田氏が寒田攻めに築いた付城。長政はここに桐山弥兵衛、黒田宗兵衛、原弥左衛門の三将と兵350人をつけた。尾根筋には3ヶ所の堀切、各郭には土塁などが良好に残る。全長200mにも及ぶ大規模な山城。

❹ 小山田城址（小山田・櫟原）

小山田谷の詰部の櫟原との境にある。深い堀切と平坦な郭、腰郭など小規模である。地名は黒岩、城ヶ平。黒田長政を撃退した峯合戦・岩丸山合戦の場所。伝説の鎮房の足跡の岩や刀を洗った千両沼、馬の背峯がある。

❺ 堂山城址（伝法寺）

城井谷の最も狭い要所で「一の戸」と呼ばれる。連続する複数の郭、堀切、土塁が残る。発掘調査で井楼櫓（せいろうやぐら）建物跡が発見された。重臣の伝法寺氏に、冬綱の頃の伝法寺四郎左衛門、鎮房の頃の伝法寺兵部大輔がいる。

❻ 釜倉城址（上香楽）小山田から撮影

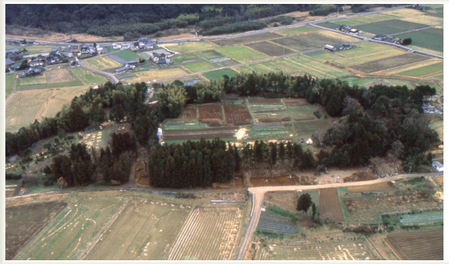
上香楽の東の山頂（高山）にある。三重の空堀と土塁、長い防塁を備えた山城で、中津方面（東方）からの攻撃に備えた。麓の上香楽の集落から山城に登る長い尾根道がある。城井氏の重臣、塩田氏に関わる山城と思われる。

❼ 赤幡城址（赤幡）

地名は切寄平。城井谷の先端、淵上寺の上にある。大型の空堀と土塁で約20m×80mの長方形の区画を持つ。『黒田家譜』には鎮房の出城で家臣の壁兵庫と城井宮内を置き、黒田長政は母里太兵衛と小河伝右衛門を派遣したとある。

❽ 広幡城址（水原・広末）発掘調査時に撮影

宇都宮氏家臣の爪田讃岐守春永が城代。春永は黒田氏に攻略され、長政の城井谷攻めの案内をしたと言われる。中央をバイパス道路工事で削り取られ、副郭（二の丸）が公園整備される。横堀を駆使した大規模な山城。



❾ 宇都宮氏館跡（松丸）

海岸線から約7㎞上流の城井谷の平野中央に、周囲より約5～10m高い広大な台地がある。ここを堀切で切り通し、南北150m、東西120mの長方形の主郭と三角形の副郭で構成され、全国的にみても大規模な館跡。発掘調査で幅7mの空堀跡や、土塁、20棟以上の建物跡や柵列などが発見された。小字名は立屋敷、隣接して上の峯、下の峯で、地元では館ノ内（タテンウチ）と呼ばれる。江戸時代に書かれた『城井谷絵図』では「城井取手屋敷跡」、『豊国紀行』には「松丸村の上、道東の側に、城井鎮房が隠居の宅にせんとて構へたる所有り、方六十間斗廻りに小土手をつき、から堀をつくれり…」と記述される。